

●研究概要

映画は「動く画像」という特性を生かし、他の媒体とは異なる形で大きな大衆性を獲得する。したがって、映画の存立には「動く画像」が前提であり、そこに何が描写され、それがどのように表現されるかが映画のあり方を規定することになる。要するに、映画を撮影する側の価値判断とそれに基づく取捨選択の営為に映画が掛かっているというわけである。ただし、以上は製作者の側からの映画論にすぎず、仮にそうしたプロセスを経て映画が完成したとしても、それが直ちに大衆性を獲得するというわけではない。映画の大衆性は、大衆の理解を前提としており、大衆の理解は、社会や文化に埋め込まれたパラダイムに規定されるからである。

このように考えると、映画を考察するには製作者の側とそれを消費する大衆の側の両面からの検討が必要となる。とはいえ実は、いずれの側からの視点を取り入れても映画が社会・文化的産物として意味を付与されることにはかわりはない。以上の視座に立ち、本研究は一義的には映画を社会・文化的脈絡の中に戻し、その意味を考察するものである。

■目的

本研究の目的は6つある。

1. 対象となる同じ映画を各研究者がそれぞれの視点から分析することで、理解が多面的になるばかりか、領域の枠を越える——共同研究の趣旨に合致して——ことで、従来から批判の多い「蛸つぼ型」の研究を打破する。
2. 上記のより学問領域間、地域間の交流を活発にする。
3. 社会・文化的産物としての映画をそれぞれの地域やテーマの専門家が分析し、それをもとに議論することで、そこに描かれている国や文化、社会あるいはテーマに関する理解をより深いものとする。
4. 本学では映画を教材として用いる教員が多い。教員間で映画の利用の仕方を互いに実演しあうことでFDの実践の一部とする。
5. 南山大学には多くの外国研究者、外国人教員が所属している。しかしながら、対外的にそうしたイメージを提示しながらも、社会に対して大学の側から理解をしてもらおうという姿勢が欠落していた。映画はその有り様から大衆性を帯び、一般にも受け入れられやすく、本学が外部に打って出る格好のテーマである。ただ、著作権の問題があり、当面は一般を巻き込んでの研究会を開催することはできないが、研究終了後には、単行本の形で研究を出版し「外国に強い」南山の中味を本学の総力をあげフルキャストで披露する。
6. 学部生・大学院生も「自主ゼミ」という形で参加を認め、教員との知的交流を可能とする教育の場を提供する。

■内容

本研究に参加する教員の研究地域、学問分野はさまざまである。したがって、本研究の特徴はその多面性にあるが、これは必ずしも研究の拡散を意味しない。各研究者が話題提供者として 1 つ映画についての分析を用意するが、それをもとに議論し、同じ対象を他の多様なアプローチから考察し議論することで、個別のテーマについての理解を深め、領域や専門分野を総合するような方法論を考えている。

【 本研究で取り扱われる地域 】

アジア（中国、台湾、インドネシア、マレーシア、ベトナム、インド）・日本・ヨーロッパ（スペイン、フランス）・北アメリカ（アメリカ合衆国、カナダ）・ラテンアメリカ（メキシコ、グアテマラ、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、ボリビア）この申請には間に合わなかったが、オセアニア・アフリカも射程に入れる。

【 本研究に参加する研究者の専門分野】

歴史学・国際関係論・教育学・文化人類学・文学・社会学・開発学・言語学・政治学・哲学。この申請には間に合わなかったが、宗教学・心理学・ほか交渉中。

【 本研究で取り扱われるテーマ】

言語表現・社会・文化的現象・作品論・監督論・他者（異文化）のイメージの生成・歴史観・社会史その他。

■独創性及び国内外の先行研究との関係、また学術の発達への貢献

我が国における映画学は、まだ歴史が浅く、「映画学」を専門として掲げている研究者の数は極めて少ない。ただし、映画学は、目下のところ、映画の本質論、演出論・監督論・映画史・芸術論に向けられ、映画が内包する社会・文化的側面はおざなりとなっている。他方、映画評論の立場からは、映画紹介や解説がある。その数は膨大であるが、多くの場合、問題となる映画の取り扱う地域やテーマの専門家によってなされるのではないため、うわべをなぞるだけの凡庸なものとなる傾向が強い。本研究は、映画を社会・文化的な産物という共通の認識を持ち、かつまた、自らが専門とする地域やテーマをもつ研究者の参加を得て行われるので、映画を 1 つのテキストとして重層的、多元的に分析することが可能となる。また、世界各地の映画を共通の場で論ずることで地域性をより明確に提示するとともに、そこに通底する普遍性を明らかにすることで、映画に関する一般論への手がかりをつかむ可能性を開くことができると考える。

我が国では映画学はおろか、映画を論ずることに抵抗を覚える風潮さえ——著しく減少したとはいえ——いまだ見られる。本研究の成果により、研究対象としての映画のもつ意義が正しく認識され、それが定着することを期待すると同時に、近年、手詰まりの観のある欧米の映画学の袋小路から抜け出るヒントも得られると考える。また、併せて、本研究でえた知見が、各研究者の専門分野・領域の研究を活性化させることも期待できる。

■本学への貢献

本研究の基本的スタンスは、安易に外部の研究者を招き、外部の力や評判によって研究を推進するというものではなく、あくまで本学の人材だけで研究会を構成し、その研究の過程で本学の研究の潜在性を高め、各部署の連携を強化し、最終的には、全学をあげてそれに取り組める機運を創出することに主眼がおかれる。また、学生にも一般にも関心の高い映画を取り上げそれを論ずることで、学内外における南山の存在感を確固たるものとする。